

真蹟遺文と肖像からみた日蓮の実像

中 尾 堯

ご紹介にあずかりました、立正大学の中尾でございます。同じ仏教系の大学で講演をするよう仰せつかりましたが、どのようなお話をしたらよいかと随分考えました。あまり正面切ったようなお話しは得意ではありませんので、最近私が経験しましたことを、自分なりにまとめて具体的に述べさせていただきます。どうぞと思います。「真蹟遺文と肖像から見た日蓮の実像」という本日のテーマにとって、少々まわりくどい話になるとは思いますが、広い範囲からこれを取りあげてみたいと存じます。

もう五年ほど前になりますが、立正大学の方から海外研修の機会を与えられました、三ヶ月間にわたってヨーロッパを訪ねることになりました。私は日本仏教史の研究を進めるにあたって、何よりもフィールドワークを身上としておりますので、出来るだけ多くのカトリック教会と、これを取り巻く中世的雰囲気伝える町を訪ねてみようと考えました。もち

ろん多国語を話せるわけでもありませんので、カトリック教会に関する書物や史書をできるだけ読みあさって、教会のイメージを作りあげるように努力しました。その結果中世のヨーロッパで栄えた、サンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼路を辿り、その道筋に点在する巡礼教会を訪れることを、一つの大きな目的として立てました。ヨーロッパ滞在の基地として選んだパリから、はるかにスペインの西北端にあたるサンチャゴ・デ・コンポステラを訪れようとしたのです。

パリから巡礼に出発するのは、ノートルダム寺院にほど近いサンゼルマン教会の脇からで、徒歩や馬に乗って遠い道を辿ります。ヨーロッパの各地から集まった巡礼者は、フランス中部のヴェズレーヤル・ピュイ、南フランスのアルルのカテドラル（Ⅱ大聖堂）などにそれぞれ集結して、定まった巡礼路を進み峻嶒なピレネー山脈を越え、苦難の末に目指すサンチャゴ・デ・コンポステラのカテドラルに到着するので

す。私はこの道を列車とバスで辿りましたが、古い宗教都市や大寺院を幾つも訪れてカトリックの持つ信仰の深い伝統を感激的に体験することができました。その有様について今語ることは出来ませんが、杖を手にした徒歩の巡礼者に幾人も出会ったことは、ほんとうに驚きでした。翻訳本で読んだ幾種類かの巡礼記の記事をいろいろと思い浮かべながら、巡礼にかかわる儀礼の痕跡を注意深く探し求めたものです。

サンチャゴ・デ・コンポステラの地名は「星の原野」という意味だそうで、ここからほど遠からぬ海岸に、聖ヤコブすなわちサンチャゴの遺骸が流れ着きました。その遺骸を安置するために構築されたのが、このカテドラルで、岡を埋めつくすように広がる中世以来の宗教都市の中央に大きくそびえ立っているのです。夏の夕方にやっと正門前に辿り着いた時、巡礼の終着点に到達し得たという感激を異教徒ながらしみじみと味わうことができた次第です。

約一週間ほど、旧市街の中にある古いホテルに滞在し、一日三回行われるミサにせっせと通いながら、街のあちこちに巡礼の残影を求めて歩きまわります。まさに中世が息づく街という実感を深くしながら、カトリックの信仰について具象的な面から観察を続けました。カテドラルの内部をまわり、僧房や図書室まで見ることが出来ましたので、他国から訪れた者としてはひと倍よく見聞したといえましょう。

夏のヴァカンス・シーズンのせいか、このカテドラルを目指して多くの人々がやって来ます。前庭に立ったかれらは、威風堂々たる伽藍を仰ぎ見て、中央の門から入ります。するとそこには樹木を形どった石柱が立っており参詣者は柱の下部に右手の指をあてて（五本の指がちょうどはまるように、五つの浅いクボミがあります）額を基壇の出っ張りにつけ、軽く祈る習わしがあります。観光客の中にまじって、明らかに巡礼者とみられる敬虔な信者が、聖地を訪れた感激をあらわにしながら柱に手を触れています。かれらは体のどこかに帆立貝の殻を着けているのですが、これはサンチャゴ巡礼のシンボルなのです。そういえば、このカテドラルに限らず、巡礼の路筋でしばしば帆立貝の紋章を目にしました。

大聖堂内の巨大な空間に一步踏み入れますと、周囲を圧するような内陣の美しい荘厳と、上方に深く孤を描くドームの重さが、たとえようもない神秘的な雰囲気をもも出し出しています。その奥まった壇（仏教では須弥壇にあたる）の上に、ガウンをまとった聖ヤコブIIサンチャゴの巨大な倚像が安置されているのです。午前十時になりますと、午前中のミサが祭壇の前で厳粛にとり行われるのですが、驚いたことにはその最中にサンチャゴ像の肩あたりから人の手が前に差し出されるのです。参詣者の顔も、像の肩越しに垣間見られるのです。一体、どういう構造になっているのでしょうか。

内陣の奥に位置する壇には、右脇からその上部に登れる階段がしつらえてあります。壇上に出るとそこはサンチャゴ像の丁度背後にあたり、宝石や帆立貝を散りばめたガウンの背中がそこにあります。低い台に上った信者たちは、父のようなサンチャゴ像の厚い肩に両手を掛け、まん中の帆立貝にキスをするので。まさに、「父なるサンチャゴ」に触れるという実感を体験するのですね。そうした後で振り返ると、そこにはサンチャゴの遺骸を納める聖なる棺が安置されていますので、この方にも祈りを捧げて、反対側の階段から降壇するのです。

私が体験したこの巡礼については、短い時間では到底述べつくすことが出来ません。けれどもこの体験を振り返ってみますと、宗教について考える上で幾つかの重要な観点がここに見出せるのではないかと思うのです。ヨーロッパのほとんど全土からサンチャゴ・デ・コンポステラを目指す巡礼路は、キリストやマリア、さらに数多くの聖人たちにまつわる聖なる物語に満たされ、聖像・聖遺物・聖遺跡などがこれを具象的に語りかけてくれます。長い旅の行程でこれらを実体験した巡礼者たちは、やがてサンチャゴの聖なる物語に満ちた終着地の街に到達し、カテドラルに安置する聖像の肩に手を触れて、父のように偉大な救いの霊力を実感するのです。巡礼者にとって、すべての救いを与えてくれるべき「神」

は、このようにきわめて具象的な姿で人々の前に現われ、祝福を与えてくれる存在に外なりません。

日本とはずいぶんかけ離れた宗教環境の中でみたカトリックの聖地の有様は、私に強烈なインパクトを与えてくれました。というのは、日本仏教の研究を進めていく上で、この種の現象はほとんど研究の主題として取りあげられることはなかったからです。ここでは優れた宗教者（道元や日蓮など）の思想や行動、あるいは教団の展開や思潮についての関心は、今更いうまでもなくまことに高いものがあります。その反面必ずしも教義から演繹されたとは言い難い信仰の実体については、むしろ、夾雑物としてこれを排除される傾向にあるといっても過言ではないでしょう。けれども、よく考えてみるとヨーロッパのカトリック信仰にみる聖人信仰に類する現象は、日本仏教についてみてもまことに顕著であります。よく知られているのは、四国八十八か所の弘法大師霊場を巡礼する遍路で物語られる弘法大師信仰があります。受難の遺蹟によって伝えられる日蓮信仰、親鸞流浪の故地をめぐる四十四輩巡拝にみる親鸞信仰などもよく知られるところで、これを「祖師信仰」と呼んでいます。日本から見れば地球の裏側にあたるサンチャゴ・デ・コンポステラを訪れて聖人信仰の姿に触れた時、日本に顕著な祖師信仰に今更ながら熱い夢を抱かざるを得ませんでした。いわば、日本仏教の「実像と虚

像」のうち、「虚像」の意味に大きな関心を持つようになったのです。

日本の仏教をリードした僧侶、特に宗祖と仰がれた人々について語るとき、第一に関心の的になるのは木像や絵像として今日に伝わる肖像であります。祖師に対してどのようなイメージを描きあげるかということ、きわめて実感的に受け取るには、それが生前のものであれ没後のものであれ、肖像に勝るものはありません。特に私が研究を続けて参りました日蓮につきましては、このような傾向が強く、早い時期から日蓮の木像や肖像画が寺院に安置されております。そのもつとも古い肖像彫刻が、東京大田区の池上本門寺に安置されている日蓮聖人木像で、国の重要文化財に指定されています。

日蓮が没したのは弘安五年（一二二二）十月十三日のことで、ちょうど満六十歳の時でした。山梨県の身延山中に隠栖していた日蓮は、長く続いた下痢の病にたえらなくなり、九月の中旬に下山を決意して故郷の安房国（千葉県）を経て常陸（茨城県）に向かいました。ところが途中にある池上右衛大夫宗仲の館に着くと、病が急に重くなって旅を続けることができなくなり、ついにここで波瀾に富んだ一生を終えたのです。その遺跡にはいま本門寺という大本山の格を誇る寺院があり、境内をはじめとする周辺の地には、日蓮をめぐる様々な伝説が語り伝えられて、聖地としての雰囲気をか

もし出しています。日蓮の七回忌の年に開眼された日蓮木坐像を安置する本門寺の大堂をはじめ、身延からの日蓮を迎えた「旅着堂」、大曼荼羅を枕頭に掛けて入滅したという「ご入滅の部屋」、遺骸を火葬にした「荼毘所」、供養塔のある「御廟所」など、霊所の数は無数といってよいほどです。また聖なる遺物も伝わっており、日蓮真筆の曼荼羅や書状、死を前にした日蓮が柱によりかかりながら『立正安国論』を講じた「およりかかりの柱」、その死を悲しく知らせた「臨滅度時の鐘」など、これまた数えきれないほどです。これらの聖所、聖物すべてが日蓮の帯びる靈性を語り、今日に伝えていけるのです。その靈性をもっとも燃え盛るのが毎年十月十二日の夜に行われる万燈供養で、池上の金山を輝きわたらせながら、お会式行事が終夜にわたって催されるのです。参詣する多くの人々は、本門寺の祖師堂に安置する日蓮の木像を拝し、先にあげた付近の聖なる場所を巡拝して帰途につきま

す。日蓮の等身の木坐像が、サンチャゴ・デ・コンポステラの大聖堂における聖ヤコブ像と同じく、堂の中央に大きく安置されているのは勿論のことです。ではこの木像について少々触れてみましょう。

この日蓮木坐像は、日蓮の七回忌にあたる正応元年（一二八八）六月八日、高弟の日持と日浄によって造立されました。像高が八五・七センチという等身大の大きさで、寄せ木

造りに彩色が施してあります。また、右手に払子を執り左手には春日版の法華経巻八を持っておりまして、その像容はその後における日蓮像の一つの典型をなしています。このような日蓮のすぐれた肖像彫刻について、二つの注目すべき点があります。その一は、日蓮の灰骨が銅製の筒に入れて胎内にしっかりと納められていることです。その二は、衣帯の下に着る白衣だけを彫り出しており、別に衣と袈裟を着せかけるようにする、いわゆる「着衣像」であることです。伝説によりますと、右手に持った払子の中には、日蓮が肌身離さず持っていた母の遺髪が交っているといわれています。この事実をみますと、池上本門寺に安置されている日蓮像は、靈性を物語る灰骨と法華経信仰を示す持経を持つことよって、生き写しの木像としての靈性を身にまとう聖像と意義づけられていることが、もつとも注目されます。ついで着衣像という型式をとることを考えますと、日蓮の弟子をはじめとする後継者たちは、この靈像に衣や袈裟を着せかけることによつて、いつまでも祖師日蓮に仕え続けることが要請されていたといえましょう。この靈像は、一門の僧俗にいつまでも奉仕されるのですから、日蓮が帯びた法華経の靈性を時代を超えて相続するという、信仰上の営みと願いを見事に表現しているのです。

その後、私は日蓮の着衣像に興味を持って各地を歩きまし

たが、案外身近にこれを見出すことができました。日蓮が貞応元年（一一二二）二月十六日に誕生したのは、安房国長狭郡東条郷片海、現在の千葉県安房郡天津小湊町小湊で、この地に誕生寺があります。宗教的英雄の華々しい生誕を物語るべく、さまざまの奇瑞が語られるこの寺の祖師堂には、本門寺におけると同様に日蓮の木坐像が安置されています。一年のことですが、この木像を修理することになり、私も招かれて参画することになりました。この時の話をいたしましょう。

誕生寺の日蓮木像は、像高七八センチの等身像で、寄木造りに彩色が施してありますが、後世の修理が徹底的なまでに加えられていて、造立当時の像容は著しく損われています。手には法華経の経巻を開き持つ、いわゆる読経姿の木像ですが、もつと特徴なことはまったくの裸形像であることです。僧侶が身に着ける、白衣・衣・袈裟など、一切彫り出してない、素裸の木像なのです。これは、本門寺の木像におけると同様に、はじめから衣を着せかける目的で作成されたもので、一門に連る僧俗が着衣という形で奉仕し続けるということとを願って造立されたものと理解することができます。

ところで、木像の修理を進めていくために、日蓮像を解体した折に、胎内から法華経の写経とともに多数の胎内納入文書を発見しました。そのうちもつとも注目すべき文書は、誕

生寺第四代の貫首職をつとめた日浄の願文です。詳細につきましても、雑誌『千葉県史研究』に寺尾英智氏が紹介記事を発表していますのでそれにゆずりますが、二点については特に注目しておきましょう。その一は、七十三歳という老齡の刑部阿闍利日静が願主となって日蓮木像の造立を發意し、貞治二年（一二三六）八月二十九日に開眼して御影堂に安置したということ。第二は、胎内に法華經の写經とともに、甘草（かんそう）等の三種の藥草を納めて「衆病悉除」を祈願し、「五穀」も併せ奉入して「五臟生身」を養うことを祈念していることです。日蓮の着衣像を造立するにあたって願主の日静が何よりも願ったことは、この木像にこめられた日蓮の靈性が少しも損われることなく、永遠に相続されるべきことでありました。このような日静の願意にそって、今日でも更衣の儀が厳格に執行され続けているのです。ですからこの木像は、まさに「生身の日蓮像」と言っても過言ではありません。「生けるが如き日蓮像」なのです。

日蓮の着衣像は、このほかにもまだ多くあります。もう二十数年前になりますが、私が編集しました『中山法華經寺史料』という史料集の中で、千葉県多古町多古にある妙光寺の祖師堂から、永和二年（一二七六）二月二十五日に、中山法華經寺貫首日尊によって開眼された日蓮木像（坐像）の胎内銘を紹介しております。この木像は誕生寺の像と同じ形式

で、胎内にも法華經の写經が納入され、胎内の背面部には日尊の自筆で日蓮を讚える銘文が墨書されています。また、この像は頬に日蓮の髭が植えつけてあると伝えられることから、「肉髭にくひげの祖師」と呼ばれて広く信仰を集めています。これもやはり「生身の日蓮像」にほかなりません。

以上のように、中世に造立された古い部に属する日蓮木像について紹介しました。これらをあわせて考えますと、次の三点が指摘されます。

a、日蓮の靈性を伝える靈像が祖師堂の壇上に高く聳えるように安置され、多くの人々によって信仰されていることが注目されます。

b、日蓮像への着衣という形をとり、僧俗が木像に関わりを持ち続けることを期待していることが、ここに物語られています。

c、安置される祖師堂の周辺は、日蓮の誕生・入滅、あるいは教化の伝説と遺跡に満たされています。

日蓮木像に対するこのような信仰は、もちろん日蓮宗に限ったわけではありません。行基菩薩、弘法大師、法然上人、親鸞上人、そして本学にも深い関係のある道元禪師においても、これと同様な信仰が見られるのです。私はこれを「祖師信仰」として捉えることにしますが、それは宗祖の宗教を一つの論理体系として理解するのは違い、実感的に体験的に

受容しようとするもう一つの立場を示すのではないでしょうか。特に木像は、視覚的な実像を信者の眼底に結ばせるに、もっとも当を得た聖物に外なりません。ヨーロッパのカトリックの聖地にみる聖人像の果たす役割と、日本の祖師像にみるそれとは、教義の相違を超えてあまりにもよく似通っているとは思えないでしょうか。しかも、このような聖人信仰が一齐に盛り上りを見せるのは、いずれも中世社会の成熟期においてのことであることは、一体どう理解すればよいのでしょうか、今後の問題は大きいと思います。

聖像崇拜と並んで、もっと直截に祖師に切りこんでいく聖物があります。日蓮についていうならば、それは日蓮みずから筆を走らせて執筆した「真蹟遺文」と呼ばれる直筆の書です。日蓮はこれを「御真蹟」と呼んで敬っています。

日蓮の遺文は「昭和定本日蓮聖人遺文」四巻に収録されていますが、その内おおよそ四分の一は真蹟が今日に伝わっています。この真蹟がもっとも多く所蔵されているのが、祈禱の霊場として有名な中山法華経寺です。千葉県市川市中山にある「聖教殿しやうきやうてん」という宝蔵には、有名な『立正安国論』など、約七十点にもほる日蓮の真蹟が厳格に護持され、そのほとんどが国宝と重要文化財に指定されています。これらの「御真蹟」の全体をみますと、ほぼ次のように分類されます。

まず第一は、日蓮が揮毫した大曼荼羅本尊で、「南無妙法

真蹟遺文と肖像からみた日蓮の実像(中尾)

蓮華経」の題目を中心とする文字曼荼羅の形をとり、軸装として現在に伝わっています。第二は『立正安国論』や『観心本尊抄』をはじめとする著書類で、卷子本や帖の形で保存されています。第三は、富木常忍や太田乗明・曾谷教信という信者に宛てた書状で、その多くは卷子本の形をとりますが、短篇のものは例外的に軸装本です。第四は写本類で、経・論・釈の抜書や一代五時図などの筆写本です。形態は、冊子本か卷子本として伝来しています。もっと詳しく学問的に説明しなくてはならないのですが、このたびは省略させていただきます。

中山法華経寺では、このように貴重な日蓮の真蹟を総合して「御聖教」として尊敬し、後世に確実に伝えることを第一の使命と観念しているのです。毎年十一月三日の午前十時から午後三時まで、中山法華経寺の聖教殿ではこれらの聖教の「お風入れ」が催されます。雨天の場合は中止されるのですが、晴天には参拝者の列が長く続くほどです。「御聖教」を厨子から運び出して広げたり、信者たちに「御真蹟」についての解説をしたりするのが私の役目ですが、はじめから終りまで堂内は厳粛な雰囲気になります。「聖教」を拝することがどんなに感激的なことであるかがよく窺われます。

聖教を納めた大きな厨子の扉を開く時に、まず厳粛な法要が営まれます。法華経の自我偈(如来寿命品の偈文)を誦読

し、題目をしばらく唱えた上で、最後に回向文を読みます。その中で「身命にかえて（御聖教を）護持し奉る」と、恭しく誓いの言葉を言上し、聖教護持の使命を強調します。一般の拝観が許されると、幾人かずつ順に堂内に入り聖教を礼拝し、日蓮の雄渾な筆致に触れて深く感激するのが常です。もちろん信者たちは日蓮の手紙に書かれた文字をよく読みとることは困難なはずですが、聖教を拝することをもってその靈性に触れたことと観念するに違いありません。つまり、これらの聖教には日蓮の靈性が豊かにこめられていて、七百数十年の歳月を超えて今私たちの前に伝えられるという深い感激を味わうのです。そういえば、祖師として崇める日蓮の営みを忠実に伝えるものの第一は、みずから染筆したこれら真蹟であることは、疑をえない事実でありましょう。このように考えますと、日蓮の真蹟が単なる教義等の伝達書にとどまらず、それ自体が聖物としての性格を帯びるようになり、大寺院に伝わる「御真蹟」をはじめとする寺宝が「靈宝」と呼ばれるようになります。したがって、日蓮の真蹟は、早い時期から護符としての意味をもつようになるのは当然のなりゆきで、曼荼羅本尊がまずその役割を担うようになります。

日蓮が揮毫した曼荼羅本尊には、料紙を継いだ大型のものと、一枚だけを用いた小型のものと二種類があります。前者は礼拝の対象として書かれたことは十分察しがつきますが、

後者はこれと違いお守りとして用いられました。というのは、小型の本尊曼荼羅には、「病即消滅不老不死」などという現世利益を祈る文句（讚文といいますが）が記されて、小さく折りたたんだ折り目によってよく窺うことができます。また、木版や模写による複製が古い時代から広く行われ、古色をつけた模本が作製されて高値で売買されたこともありま

す。このような事柄が流行した背景には、日蓮の真蹟が護符としてその効力を期待された事実があったことは言うまでもありません。贋作について、江戸時代前期に由井正雪が反乱を起こすにあたり、日蓮の真蹟を数多く作って高値で売り捌き、軍資金を集めたという伝承があるほどです。

いっぽう、日蓮の真蹟書状もやがて聖物化して、護符としての役割を担うようになります。日蓮の真蹟について顕著な事柄の一は、もとは一まとめであった一通の書状が、幾紙かの「断簡」や数行の「断片」に細分され、全国各地に広く伝わっていることです。例えば、京都の本山あたりには書状の一紙だけが軸物に仕立てられて靈宝として伝わっていたり、九州の寺にわずか一行だけが小型の軸物として大事にされていたりすることがあります。これらのほとんどは、立正安国会の手で『日蓮聖人御真蹟』と題する写真集に収められていますので、その全容を窺うことができます。では、どうしてこのような分割がなされるようになったのでしょうか。

日蓮が入滅しますと、弟子たちはそれぞれに師からの正統を継承する者としての自己を確認し、教団の中でしっかりとした立場を確立しようと努力しています。この時、師から受法したあかしとして提示されるのが、この真蹟なのです。ですから、師から弟子へと血脈が継承される時には、何よりもまず真蹟が伝法の象徴として弟子に伝授されます。いうまでもなく初期の教団はさらに拡大発展の途を辿りますので、この真蹟は「唯授一人」というわけにはいかず、幾人かの弟子たちに一行、二行と切り離して授与し、伝法の意を表わす習わしが広く行われるようになりました。つまり、伝法の意味を持つ真蹟の相伝が、そのまま真蹟の分割の始まりとなったわけです。このような「伝法」については、教義や儀礼の相伝を意味することはもちろんですが、祖師からの霊性の相承という一面を決して見逃すわけにはいきません。この段階に

なりますと、真蹟の分割相伝はもはや祖師の霊性の継受という点で、重要な意味を持つようになります。仏教の思想には「一々文々、是真仏」、つまり経文の一字一文字はすべて真の仏であるという考えがあります。この言葉を敷衍しますと、真蹟の一文、一文字はすべて日蓮の霊性を伝えるものに外ならないはずです。したがって、一行あるいは数文字に小さく刻んで一般の信者に譲与された真蹟は、それぞれに日蓮の霊性を伝える聖物に外ならず、「お護り」や「護符」として

の性格を帯びるようになりました。わずか数行ほどの日蓮の真蹟が切断された跡をよく見ると、一文字づつの切跡がはっきりと認められることがあります。これは恐らく護符として飲んだものに違いありません。

日蓮の真蹟について色々とお話しましたが、これを要約すると次のような事柄が指摘できます。第一には、日蓮の真蹟が霊性を帯びた聖遺物として嚴重に護持されているということ。第二には、「お風入れ」というような機会に日蓮の真蹟に接し、その霊性を身に受けるといふ現世利益の信仰がみられるということです。第三には、日蓮の霊的な物語を背景に、聖教の霊性がさらに増幅され、やがては呪符としての性格を帯びること、この三点です。祖師信仰において日蓮の真蹟遺文は教義の根底をなすものであることはいうまでもありませんが、その一方で、木像や画像とともに、いやそれ以上に祖師の霊性を伝える聖物として重要な役割を果たし続けたことは言うまでもありません。

師日蓮に対する弟子や信者たちの霊的な観念は、しかしながら日蓮の生前からすでにみられるものでした。これを物語る真蹟遺文として、中山法華経寺に伝わる「四信五品抄」一巻をあげることができます。この書は、下総国若宮（華州市川市若宮）に住む富木常忍が、みずから信仰の在り方について日蓮に問うた「四信五品抄問状」に対する回答の書状なの

です。この書状の動きについて、もう少し詳しく述べましょう。まず、富木常忍は、日蓮の弟子で下総出身の日頂に対して、身延山に隠栖する師日蓮の指導を仰ぐよう、「四信五品抄問状」を認めます。日頂はこの書を携えて身延を訪れて日蓮に差し出し、質問の意味を言上します。すると日蓮はこれに答えて「四信五品抄」を染筆して日頂に託し、再び下総国に向かわせるのです。日頂は下総に帰着するとこの書状を富木常忍に届け、信者たちが大勢集まる講会の場でこれを読みあげ、解説を加えます。その内容についていくつか述べましょう。

富木常忍は、「四信五品抄問状」の中で次のように信仰上の悩みを述べ、適切な指示を求めています。もちろんこれ以外にも具体的な事柄を挙げているのですが、今は三点だけを述べましょう。

○受け難き人身を受け、遇い難かるの仏法に遇うことは宿善の感ずる所か。但し、たまたま明師（日蓮）に逢い奉り、法門（仏法）を聴聞せしむといえども、根性は暗鈍の間、得る所の法門たちまちに忘失す。

○愚身（富木常忍）仏法を信ずといえども、師匠（日蓮）に遠離し奉るによって、昔わずかに聞く所の法門は、皆もって忘失す。

○速に蘭室（身延の庵室をいう）に入りて、（日蓮に）親近給

仕し奉らんと欲す。今生空しく過ぎば後悔何ぞ追わん、もつとも賢察を仰ぐものなり。

これらを要約すれば、まず人と生まれて法華経の教えにめぐりあったことをこの上なく喜ぶ半面、折角明師たる日蓮から直接に聞いた仏教の教えを次々と忘れ去ることを深く憂慮するのです。この恐れをなくするためには、常に日蓮の「恩顔に親近し」「親近給仕」することを最上のことと思ひ、師の隠栖する身延山に自分も赴きたいと願う。いわば富木常忍が出家を望む書なのです。日蓮は常忍のこのような願いに対して「四信五品抄」と称する書状を認め、法華経信仰は形式よりも「信」を基にしなくてはならないことをまず強調します。その上で、常忍が求める出家・遁世の願を拒否し、在俗のままに法華信仰を守り進めることを強く説示しました。この両書は、法華経信仰の在り方を示す上で重要な書状として重要視されるのですが、ここでは出家を求める富木常忍の意志に注目する必要があります。かれは、仏法の師と仰ぐ日蓮の住処から遙かに道を距てた遠隔の地に住むことによって、ついに成仏の縁から漏れてしまうことを何よりも恐れています。この危惧から逃れて成仏の証を得るには、みずから世俗を脱して出家の身となって身延山に住み、常に日蓮の恩顔に接して給仕することが第一であると願うのです。このような日蓮に対して抱く常忍の敬慕の念は、そのまま祖師信仰の素

地をなすものであって、すでに日蓮の生前からはつきりと芽生えていたことを指摘できるのです。

日本仏教の歩みをずっと辿ってみますと、祖師をはじめとする宗教的人格に対する深い敬慕と期待の念がその底流を貫いているように見えます。宗派仏教ともいわれるわが国の仏教の特色は、じつはこのような祖師信仰に立脚しているといっても過言ではないでしょう。もちろん、祖師の神格化そのものは、歴史的存在としてのある人物の実像を覆い隠してしまふ恐れは多分にあるわけですが、それは宗教の受容者側にひそむ心意、つまり信仰の場における心的状況をよく物語るのではないのでしょうか。長い歴史を超えて、人々がある宗教的偉人をどういう観念をもって受けとめ、何を求めようとしたかについて明らかにすることは、仏教の歩みについて語る

とき、第一の重要な側面といえましょう。祖師信仰が果たしたもう一つの点は、神話という衣を厚くまといながら今日に伝えられた聖遺物が、却って祖師の実像を知る上で重要な手掛りを提供してくれることです。いわば、仏教を語る文化遺産が、祖師信仰によって守られ伝えられてきたことは重要です。これらの事柄について、私がライフワークとしている日蓮信仰についてお話ししましたが、これはけっして日蓮に限らずすべての祖師についていえることなのです。さらに宗教と国を超えて、ヨーロッパのカトリックにおける聖人信

仰についても同じことが指摘できます。最初にサンチャゴ・デ・コンポステラにおける聖人信仰を述べましたのも、このような観点についてお話ししたかったからです。聖人信仰なしに祖師信仰についての私の考えを述べさせていただき、本日の講演を終りといたします。

(本稿は、平成四年十一月九日に行なわれた公開講演の記録をもとに、先生に加筆訂正していただいたものです)